



地元歓迎オープニングアトラクションで素敵な演奏を披露してくれた聖和学園高等学校吹奏楽部の皆さん。



若い自治研中央推進委員によるニュース風の基調提起。



地連毎に趣向を凝らした分科会紹介で、伊達政宗も登場。



参加者の投票で受賞チャレサポが決まりました。



全国各地から仲間が宮城に集まりました。

2016年10月14日～15日、全国から約1800人が参加し、東日本大震災発生から5年を経過した被災地・宮城県にて、宮城自治研が開催されました。今回は「固むべ、東北・宮城で、希望の鍋」をサブテーマに、震災を風化させないこと、全国から震災支援に携わった方への感謝と、今後も困難を乗り越えながら力強く生きていくことを被災地から発信しました。

第36回地方自治研究全国集会 宮城自治研



命 第1分科会「～生きる～「いのち」を育む・いかす、支えあう」



知 第3分科会「石巻に虹を架けよう！」



自治研活動部門優秀賞を受賞された福井・越前市職員組合の緒方祐さん。



宮城自治研の意義を熱く語った実行委員長の伊藤利花・宮城県本部中央執行委員長。



第13回自治研賞を受賞された皆さん(左)。被災地でコミュニティ再建に取り組む遠野山・里・暮らしネットワークの佐藤喜広さん(右)。



分科会

・10月15日(土)

「命」いのちを守る・育てる」「知」東北・宮城を知る」「興」ムラ・まちをおこす」「継」未来へつなぐ」「支」くらしを支える」「創」住民とつくる」の6つのキーワードのカテゴリーで12



パネルディスカッション第2部では、地域に飛び込んだ若い地域おこし協力隊がパネリストとして登場。



増田聡・東北大学大学院経済学研究科教授の記念講演

全体会

・10月14日(金)

全体会では、自治研中央推進委員による趣向を凝らした基調提起を受けて、増田聡・東北大学大学院経済学研究科教授から「宮城の未来、復興へのまちづくり」と題する記念講演がありました。続くパネルディスカッションでは、「希望の光を地域から若者も高齢者もいきいきとくらせるまちづくり」をテーマに、2部構成でパネリストとTwitterを利用した会場参加者が未来について熱く語り合いました。
(記念講演は本誌50頁、パネルディスカッションは次頁にて紹介します)

フィールドワーク

・10月16日(日)



被災地の食を堪能し、前夜祭は大いに盛り上がりました。

る演奏、郷土芸能などが披露されたほか、ご当地グルメ、地酒スイーツなどの夜店が全国からの参加者の心と胃袋を満足させていました。また会場のあちこちで、全国からの支援者と被災単組とが再会する姿もみられ、約1000人の参加者は素敵な仙台の夜を満喫しました。

分科会翌日には、宮城県と福島県の津波による被害の大きかった沿岸地域をめぐるフィールドワークが行われました。いま



被災地を代表して全国からの支援に感謝の想いなどが語られました。



東北の地酒やビールの集まった「みちのく良い酔いまつり」。

前夜祭

・10月13日(木)

集会前夜には、自治研集会初の試みとして、復興を誓う東北地連の協力で、地元高校生によ



継 第7分科会「若者の力は無限大∞」



興 第5分科会「まちムラの見方「見えているもの」と「見えていないもの」」



創 第11分科会「じちけん入門!!」



支 第10分科会「公共交通は誰のもの?みんなのもの!!」



第13分科会「UNDER35「おさんぽカフェ」

の分科会とUNDE R35の計13分科会
が開催。全員参加のグループワークや、
会場からまちへ飛び出すなど、参加型
の運営で盛り上がりました。
(分科会の報告は本誌2017年1月号から順
次掲載予定です)



南北2つのコースに分かれて津波の傷跡の残る被災地を巡りました。

だ震災の傷跡が各所に残っており、
震災を風化させない取り組みの重要性を再認識しました。